

一、次の①～⑤の文の——線部のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

- ① この美術館は、地域の発展のために、町の有力者がシザイを投じて作ったものだ。
- ② 教科書を読んだだけではハンゼンとしなかったことが、授業を通してよく理解できた。
- ③ 歴史ある町なので、ピカンを維持いじするために、高い建物の建築が規制されている。
- ④ 地震などのフソクの事態に備えて、日頃ひごろから水や食糧しょくりょうなどを準備しておくことが大切だ。
- ⑤ 社会で活躍かつやくするには、ガイブを気にしすぎず、積極的に発言していくことが必要だ。

二、例にならって、次の①～⑤の にあてはまる言葉をひらがなで答えなさい。ただし、 には「」内の文字数のひらがなが入るものとします。

例
この映画は、現代社会に一石を ものだ。 「四」
〈答〉とうじる

- ① 思ってもみなかったことで褒められた彼は、 につままれたような顔をしていた。〔三〕
- ② 援助は惜しまないと言われたことを に取って、次々に要求を出した。〔二〕
- ③ この大学の出身者で、オリンピックのメダルを獲得した人物は、五指に 。〔三〕
- ④ 三日もあれば夏休みの宿題を終わらせられると、友達の前で大見得を 。〔二〕
- ⑤ 運動神経がよい彼は、中学に入学すると、いろんな運動部から引く手 だった。〔三〕

三、次の文章は、木皿泉の『さざなみのよる』の一節である。理容室「バーバー・ナカムラ」を営む清二は、友人のマンボから、二人と同じ中学に通っていたナスミが亡くなったことを知らされた。中学時代の清二とナスミに関するうわさ話について、客のジイさんの前でマンボと清二が話していたところ、清二の妻である利恵が帰ってきた。これを読んで、あとの問いに答えなさい。

妻の利恵が戻ってくると、さすがにマンボもナスミの話をぴたりとやめて、最近ハマっている苔の栽培についてしゃべり始めた。

空気を読めない客のジイさんが何か言い出さないと心配で清二が振り向くと、あごを突き出し、口を大きく開けて眠っていた。利恵もつられてジイさんの方を見ると、

「やだ。死んでる人みたい」と笑った。

電池が切れたみたいに眠っているジイさんが、ある日、突然動かなくなったカナブンみたいに見えて、気がつくとき清二は涙を出していた。

それを見た利恵が驚いて、

「どうしたの？」と聞くと、

「いや、人って死ぬんだなあと思って」

清二は、利恵に見られないよう涙をふく。ちらりとマンボを見ると、オレにはわかるぞと言わんばかりに、こちらを見てうなずいているのが腹立たしい。でも、マンボはしゃべらないだろう。イラッときせられるヤツだが、そのへんのことには信じている。

「あつたり前じゃないッ！ 私もアンタも、あそこでヘラヘラ笑ってるマンボもみんな死ぬに決まってるの。なに大発明みたいに言ってるのよお」

利恵は爆笑して清二の背中をたたく。たたかれた清二は、そうじゃなくて、と思うが、うまく説明できそうもない。

暑い、あの教室で、下敷きでばたばたスカートの下をあおいでいたナスミもまた、今朝、このジイさんのように、突然動かなくなってしまったんだと思うと、悲しみというか、不条理というか、^①見たくもないのに無理やり見せられた手品を目にしたような心持ちで、どうリアクションすれば正解なのか、よくわからないのだ。

だから、ふいに涙が出た自分にあわてた。悲しみより先に出た涙は、自分が冷静な分、その形状や位

(1-3)

置が、いやによくわかった。ぼろんぼろんと水の粒が目端から頬へ、移動してゆくのが文字通り肌でわかる。

「そのとき、泣いた？」

中学のとき、アナスミに聞かれ、

「んなもん、泣くわけないだろう」

と言ったのを清二は思い出した。

胸元にエンジ色のリボンが揺れていたから、冬の制服だったのだろう。振り向いたナスミは、ショートカットの頭だった。

「オレが泣くときは、財布を落としたときだけだよ」

「なんだよ、それ」

ナスミは気が抜けたように笑った。

あのとき、清二とナスミは同じ学年だったが、一緒のクラスになったのは一年のときだけだった。だから三年になって、放課後、金網越しに、ぼんやり野球部の練習を見ていたナスミを見つけたとき、別に声をかけるつもりはなく、それは向こうも同じだと思っていた。

清二は、野球部だったが、ケガが元で退部してしまった。それ以来、部員たちが練習している姿など見たくもなかったのだ。そんなところで立ち止まるわけにはゆかなかった。なのに、その日、清二の一番イヤな場所でナスミが声をかけてきたのだった。

「ナカムラってさ、野球部じゃなかったっけ？」

よりによって、ナスミは^②一番聞いて欲しくないコトバを言い放った。たしかに持っているバッグは部員たちが持っているのと同じようなものだが、今はユニホームではなく、教科書とかマンガ本とかゲーム攻略本しか入っていない。清二が無視を決めて行こうとすると、ナスミはしつこく、なおも引き止める。

「今日、練習、さぼったんだ？」

真っ直ぐにナスミに見られて、清二はしかたなく本当のことを言う。監督にいいところを見せようとフェンスによじ登ってフライをキャッチした後、そこから落下してしまい、^ウ足の骨を折ったこと。金属のプレートに骨にとりつける手術をして、それから何カ月も経って、そのプレートを取る手術をしたこと。その後、元のようにプレーできるつもりでいたのに、練習不足なのか、うまく足が治ってい

(1-4)

なかったのか、それともケガのトラウマで思いっきりプレーできなくなったのか、自分がいない間に他のチームメイトが団結したかのように思えて気をなくしたのか、とにかく試合に出してもらおうチャンスはどんどん減ってゆき、出してもらっても全く力が発揮できず、結局やめてしまったということを話して聞かせた。

ナスミは黙って聞いていた。そして、清二に聞いたのだ。

「そのとき、泣いた？」

清二は泣かなかった。正確に言うと、泣くという選択肢があるとは思っていなかった。泣くというより、気をまぎらわせるのに必死だった。そのことについて、一秒も考えたくなかった。そういうことはナスミには説明しなかった。してもわかりっこない、と思ったからだ。

次の日、教室で、ナスミは最近、母親を亡くしたばかりだということを友人から聞き、ぼんやりと金網にしがみついていたのは、彼女もまた大事なものを失ったからなのかと気づいた。

帰り道、つまらなそうに一人歩くナスミを見かけたとき、ファストフード店に誘ったのは清二だった。よくわからないが、^③不公平だと思つたからだ。ちゃんとナスミの話も聞かなければならないと思つた。自分から話してくれればだが。

ナスミは、実は自分も泣かなかったんだよねえという話をした。母親の病状が悪くなってゆくのに、突然良い子になるのつて、なんか口コツつて言うか、あんた余命わずかですよつて言ってる感じじゃない？ そうゆうカッターっていうの？ そんなのがあつて、素直になれなかったのよ。それがよくなかったのかなあ。母親が亡くなっても、やっぱり素直になれなくて、私、ゼンゼン泣かなかったんだよねえ、とストローでもうほとんどない飲み物をいつまでもしっこく吸いながら、そんな話をした。

「私、冷たい人間なのかな？」

ナスミは、^オ気弱く笑いながらそう言つた。

「そうじゃなくて」

と清二は言つたが、その後のコトバは考えてなかった。「そんなことないよ」と言うつもりだったが、そんな使いふるされた、ありきたりの慰めをナスミに言いたくなかつた。

「そうじゃなくて、本当に大切なものを失つたときつて、泣けないんじゃないかな」

清二のもっともらしい顔を、ナスミはちよつと笑う。

「じゃあ、いつ泣くのよ？」

清二は、少し考えて、

「あれは大切なものだったなあと、後から思つたときに泣けるんじゃないの？」
でませだつたが、清二は案外、本当にそうなんじゃないの？と自分でも思う。

ナスミは、ふうんと遠くを見ながら、

「私、まだ過去のことじゃないんだ」

「うん、そう。オレも、まだ過去になつてないんだな、部活やめたこと」

^④清二はおかしかつた。こうやって、屋下がり、ポテトを食べながらコーラを飲んでいる二人が悲しみの真つ只中^{ただなか}にいるなんて、そのことについて話しているなんて、誰も知らないのだ。そして、泣けないぐらい悲しいことが、この世にあるつてことを、オレたちは知っている。こんなにありきたりの風景の中にいるというのに。

だから、ナスミがツリーを見たいと言つたとき、^カ絶対にかなえてやりたいと思つたのだつた。そうすることで清二もまた失つたものを取り返せると、なぜそんなふうにしたのかかわからないが、とにかくそう思つたのだ。

清二は、理容室のレジから、母親の財布から、父親の五百円玉貯金から、毎日少しずつかすめ取つて、東京行きのお金をつくつていった。いざとなつたら千葉に引越した友人の家に泊めてもらうつもりだつた。その手紙もすでに投函した。友人への手土産^{てみやげ}、といつても商店街の店先で焼いているバットやグローブをかたどつた野球カステラだが、それもちゃんと用意した。

なのに、ナスミは来なかつた。オハギをつくつて行けなかつたというのは、ウソだつたのではないかと今の清二は思う。今でも気になっているのは、家出の前日、ナスミが清二に念を押すように聞いたことだ。

「本当はさ、一緒に行くの、私じゃなくてもいいんだよね」

そうナスミに言われて、清二は何を今さらと思つた。

「オグ二とじゃなきゃ、意味がない」

「どうして私でなきゃ意味がないの？」

「——そりゃ、好きだからだよ」

そう聞いて、^⑤ナスミは黙ってしまった。嬉しいという顔でもなく、不愉快^{ふゆかい}という顔でもなかつた。清二は気をもんだ。間を置かずもう少しはやく言えばよかったのだろうか、それとも声のトーンがまづかつたのか。「好き」なんて、軽々しく言うべきではなかつたのか。

「オグ二の方はどうなんだよ。そつちこそ、本当はオレとなんか行きたくないんじゃないのか」

「沈黙にたえきれず、清二が聞くと、

「そんなことない。私も、ナカムラのこと好きだよ」

とナスミはぶっきらぼうに答えた。

ナスミはあのかとき、もっと違う答えを期待していたんじゃないだろうか。そのことを思い出したに、清二はその後悔してきた。何が正解だったのか、何十年かの間、思い出しては答えを探すが、今になっても思い当たることはない。

清二が「バーバー・ナカムラ」の看板の電源を切って、シャッターを下ろし、店内に入ると、利恵が明日使う大量のタオルを一枚一枚たたんでいた。手だけ見ていると、ロボットのよう規則正しかった。ヒゲ剃り用の石鹸を泡立てているときも、客の襟足に汚れないよう薄い紙をあてるときも、利恵の手の動きには無駄がない。清二は今日一日、利恵のそんな動きばかり見ていた。そうすると、心が落ちついてくるのだ。

ふと、利恵に全部話してみたくなった。中学のオレは、あのかとき、なんと答えれば正解だったのか。利恵なら教えてくれるような気がする。

「あのか、今日、オレ、通夜に行くって言ってただろ。その死んだヤツっていうのはさあ」

「知ってる。一緒に家出しようと思った子なんですよ？」

マンボから聞いたと利恵は言った。

清二はマンボを少しの間でも信じたことを悔やんだ。だったら、ちゃんと本当のことを聞かせなければならぬ。清二は、マンボの知らない本当の話を聞かせて、「^⑥好きだからだよ」と伝えたときのナスミの表情がいまだにわからないのだと白状した。

A と聞いていた利恵は、

「それは、あんたがウソをついたから、そんな顔をしたんじゃないの」と断言した。

「ウソなんかついてない。そのときのオレの本当の気持ちだよ」

「そうかなあ。そのとき、ナスミさんより好きなもの、あったんじゃないの？」

「二股ってことか？ 冗談じゃないよ。そんなことしてねーし」

「じゃなくて、そのとき、あんたが本当に好きだったのは野球でしょ？」

清二は絶句した。その通りだった。まだ野球に未練 **B** だった。あきらめきれず、 **C** とし

ていた。

「そのことを知っていたんだね、ナスミさんは」

清二は、ナスミのいつも笑っているように見える、そのくせ人を見透かすような瞳を思い出す。

「でも、ナスミさんもウソついていたんだね」

清二は「ん？」という顔で利恵を見る。

「本当は、あんたじゃなくて、お母さんに好きって言いたかったんじゃないかなあ」

清二の頭にあつた、何十年も **D** していた霧のようなものが、利恵のコトバで一瞬にして晴れてゆく。そうか、そうだったのか。オレたちは、自分自身に互いにウソをついていたのか。ナスミが約束の場所に来なかったのは、「それは違うよ」というメッセージだったのだ。

「はやく行きなよ。あんまり遅くなったら、向こうも迷惑だよ」

「うん、そーだな」

清二が奥に入ると、喪服が掛けてあつて、テーブルに数珠と香典が置いてあつた。香典の中身もちやんと入っていた。清二が喪服に着替えて出て行こうとすると、利恵が「ちよつと待って」と店に走ってゆく。小さなバリカンを持ってきて、清二の肩にタオルをかけて襟足にバリカンの刃をあてる。利恵の柔らかな手とバリカンの機械音のアンバランスな感じが、清二はとても好きだった。

「^⑦みんな、こういうとこ見てんのよ。あんた散髪屋なんだからさ」

「うん」

利恵はタオルを取って、襟足を丁寧にぬぐい、一丁上がりというように清二の背中を押し「いってらっしゃい」と笑った。

清二が最後のお別れで見たナスミは、「そのとき、泣いた？」と聞いたときと同じショートカットだった。清二の体の奥から、あのかとき、自分が言わねばならなかったコトバがあふれてくる。

オレは、さびしかった。誰かに優しくしてもらいたかった。泣きたかった。側にいて欲しかった。一人だった。ものすごく一人だった。なんで一人なんだと怒っていた。ずっと怒っていた。なのに怖かった。怖くてさびしかった。わかるよって言って欲しかった。誰かとずっと一緒にいたかった。

清二は、ナスミと話したファストフード店を思い出す。二人が悲しみの真っ只中にいたことを。あれは、悲しいけれど、少し甘酸っぱい時間だった。同じくらい悲しかったのに、二人は決して交わらず、別々の悲しみを抱えて途方にくれていた。ありきたりの風景の中で、ただただ立ち止まるしかなかった。

通夜からの帰り、清二の足は、履き慣れない黒い革靴が固いせいか、歩くたびに力カトがこすれ、どんどん痛くなってくるようだった。

「でも、歩いていかなきゃなんないんだな、人生は」

清二の口から、そんなひとり言が出る。ナスミが約束の時間に来なかったのは、そう言いたかったからだろう。それでも生きてゆかねばならない。しかもたった一人で。現に、今日、ナスミは一人で逝ってしまった。

でも、あのときに比べれば、まだましだと思う。あいかわらず一人には違いないが、少なくとも今の自分には行き先がわかっているのだから。とりあえず、今オレは、利恵のいる場所を目指して歩いている。そう思うと、たった一人で歩くことは、全然怖くなかった。

——木皿泉『さざなみのよる』による

(問題作成上の都合から一部原文の表記を改めた)

問一——線部①に「見たくもないのに無理やり見せられた手品を目にした」とありますが、これはどういうことですか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 客のジイさんが眠っているのを見て「死んでる人みたい」と言った利恵の言葉をきっかけに、この世を去っても記憶の中で生き続けているナスミに思いをはせた清二は、自然と涙があふれ出し、これまでナスミを思い続けてきた自分の内面を露呈させられてしまったということ。

イ 中学の同級生に過ぎないはずのナスミの死に際し、不覚にも涙を流してしまった清二は、妻の利恵に気づかれないようにしたが、その清二の心の中に土足で踏み込むかのように、めざといマインボが、自分は気づいたということを経二に一方的に伝えてきたということ。

ウ 「死んでる人みたい」という利恵の言葉によって、急に動かなくなったジイさんと突然死んでしまったナスミが重なり、清二は、命のはかなさや死の厳粛さに改めて気づくとともに、今を精一杯生きることの大切さを認識せざるを得なかったということ。

エ ナスミの死の話を聞いたばかりだった清二は、眠っているジイさんを死んでいるかのように錯覚してしまったことで、人間という存在のはかなさを感じていたのに、利恵がそれを感傷的な反応だと大笑いしたことに違和感を覚えたが、満足に反論できなかったということ。

オ 眠っている客のジイさんのことを利恵が「死んでる人みたい」と言ったことで、清二は、人間は突然死ぬのだと改めて気づかされ、そのことによって、今でも生き生きとした姿で思い出されるナスミが今朝突然死んでしまったという現実を突きつけられたということ。

【下書き欄】らん
—— 必要ならば使いなさい。

【下書き欄】—— 必要ならば使いなさい。

ア 泣くこともできないほど悲しい体験をしたはずの二人なのに、それを忘れて明るく前向きにありきたりの日々を送っていることが、不思議で、どこか非現実的に感じられたということ。

けの秘密である、悲しい出来事の話をしていることに、密やか^{ひそ}なときめきを感じたということ。とても悲しい体験をした二人の中学生が、日常のありふれた風景の中にいる人々の目を気にしすぎるせいで、その悲しみをまだ素直^{すなお}に外に出すことができずにいるということ。

ウ とても悲しい体験をした二人の中学生が、日常のありふれた風景の中にいる人々の目を気にしすぎるせいで、その悲しみをまだ素直に外に出すことができずにいるということ。

エ 一見ごく普通の中学生にしか見えない二人の会話の内容が、深い悲しみに包まれた非日常的なものであるなどとは、周りにいる人たちは思わないだろうということ。

才 泣くこともできないほど悲しい思い出の話をしている二人であるはずなのに、学校帰りの日常的な場所で話していると、周囲の目が気にならなくなり、心が落ち着いてきたということ。

ア 清二は自分のことを好きだからだと言ったが、本当のことを言っていないと思ったから。

イ 自分でなくてはいけない理由を聞いたとき、清二が一瞬いっしゆんとはいえ言葉につまったから。

ウ 清二のことは決して嫌いだ^{きん}ではないが、本気で一緒^{いっしょ}に家出するほどの相手ではないと思つたから。

工 自分に好意があるとうすうす感じていたが、清二から改めて好きだと言われて面食らったから。

才 清二から好きだと言われたが、その口調から自分をだまそうとしていると直感したから。

【下書き欄】—— 必要ならば使いなさい。

20

エ	ウ	イ	ア
たら	もん	ふん	もや
たら	もん	ふん	もや
たら	もん	ふん	もや

ア 人は普通、散髪屋としての腕の良し悪しを、バリカンの使い方を見て判断するものだ、清二に知ってほしいということ。

イ 世間の人は清二のことを散髪屋として見ているので、些細なことであつても自分の髪について
は気を配ったほうがよいということ。

ウ 妻である身としては、いつまでも腕が上がらない清二に、そろそろ散髪屋として一人前になつてもらいたいと思つてゐるということ。

工 散髪屋のような技術を売りにしている職業の人は、厳しい視線を世間から向けられ、小さな失敗でも見逃^{みのが}してもらえないものだということ。

才目につきにくいとはいえ、襟足のようなところをおろそかにさせておいては、散髪屋の妻として自分が恥をかうてしまうことになるということ。

問九 ―― 線部⑧に「今の自分には行き先がわかつている」とありますが、それはどうしてですか。
その説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 今も昔もナスミの本心を理解することができていないことに変わりが、一人で悩んで孤独を感じていた昔とは違い、今は親身になって一緒に悩んでくれる利恵というもう一人の自分のような存在があるから。

イ 今も昔も深い悲しみの淵にいたときの自分の孤独感に変わりはないが、その場しのぎの言葉で自分をごまかしていた昔とは違い、今は自分のことを信頼してくれている利恵を幸せにすることが、自分の幸せだと思うようになったから。

ウ 今も昔も悲しみを背負っていることには変わらないが、自分の気持ちの持っていきようを見失っていた昔とは違い、今は自分のことをよく理解してくれ、また素直に思ったことを語り合える利恵という頼れる存在があるから。

エ 今も昔も心に痛みを感じたことには変わらないが、ナスミが約束の時間に来なかったことで打ちめされてしまった昔とは違い、今は心の痛みを感じつつも、そんな自分を支えてくれる利恵との人生が目の前に広がっているから。

オ 今も昔も人生が厳しいものであることに変わらないが、野球を続けていく自信を失ったせいで将来を悩むばかりだった昔とは違い、今の自分には、仕草の一つ一つに見惚れてしまい、散髪屋としての自分を導いてくれる利恵という存在があるから。

(1-15)

問十 ―― 線部ア～カを、時系列に沿って順番に並び替えた時、三番目と六番目になるものをア～カの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

(1-16)

四、次の文章は、ある中国哲学の研究者が書いたものです。これを読んで、あとの問いに答えなさい。

研究成果には、大別して論文と報告とがあると私は考えている。その両者はそれぞれ任務を異にしている。その価値に上下はない。

ところが、研究者の中には、この両者の区別をしなかったり、あるいは根本的には研究の目的が分らなかったりする人がいる。

もし論文とB銘打つならば、少くとも「論」がなくてはならない。そして、その「論」を有効にするための証拠としての事実調査すなわち報告がなくてはならない。すぐれた報告の集積の上に立つてこそ、良い「論」ができるわけである。

私の言う報告とは、たとえば読解資料の提示（訳注など）・統計など計量的調査・書誌・年譜・資料紹介・文献提要・目録（書籍・論文などの）・訓詁（出典調査など）・翻訳・書評・事項の一般的説明・辞典項目・研究史など客観性のあるものである。

この報告は、①実証的手法に徹したものでなくてはならない。また、こうした報告は訓練によって身につけるものであり、教育によって作成力の養成が可能なるものである。いわゆるアカデミシャンとは、こうした報告を作成する技術を会得した者である。研究とは、まず報告を書くことである。

しかし、これはそう簡単なことではない。奥が深い。C会心の報告はそうあるものではない。おたがい大した才能があるわけではないから、できぐあいはチヨボチヨボである。しかし、②ともかく根気よく時間をかけ努力すれば、形にすることができる。だから、研究者の心がけとして、努力を武器にして常に報告を書くべきである。すぐれた報告が書けるということは、研究者として一人前であることを意味する。

報告は、実証的手法に基づき、時間や努力や根気などをかけると必ずできる客観的なものである。くつかえし言うが、報告と論文とは分野が異なるので、報告と論文との間に価値の上下はない。

さて、論文である。「論の文」である以上、そこに「論」がなくてはならない。これも報告と同様、そう簡単なことではない。というのは、実証的手法だけでは「論」を立てることができず、「論」にはアイデアが必要だからである。

それはこういうことである。「論」に必要な条件は、推し量って一つの新しい意見を提出することであり、その推量は実証ではなく、或る飛躍を伴う。そのジャンプができるにはアイデアがひらめかなくてはならない。あえて言えば、実証的手法を忘れてジャンプすることである。

(1-17)

ただし、あくまでもジャンプであるから、しっかりと地についたジャンプ台が必要である。そのしっかりしたジャンプ台こそ、実証的報告である。

すぐれた実証的報告に基づいて、推量（ジャンプ）を行ない、或る見かたを提供するのが論文である。その見かたは、もちろん仮説である。論文とは、見かたの提供である。その見かたによって、中国文化を（全体的にせよ、部分的にせよ）どれくらい広く、あるいは深く見ることができるようになるかということによって、その論文の価値が定まる。

たとえば、ニュートンの仮説が出てくることによって、世界をそれ以前より大きく把握することができた。さらにアインシュタインの登場によってニュートンの世界よりもっと広く深く世界を把握することができるようになった。おそらく、将来、或る天才の登場によって提出される仮説によって、アインシュタインの世界よりもさらに広く深く世界を理解することができるようになるであろう。

われわれの場合、或る論文の登場によって、中国文化を（全体的であれ、部分的であれ）見る見かたがより豊かになることができるならば、それは本物の「論」を持っていたことになる。

ところで、私が青年時代に耳にタコができるほど聞かされたのは「実証的論文を書け」ということばである。そのころは、そういうものと思っていたが、後にだんだんと懷疑的になっていった。③そもそも「実証的論文」などというものは、存在しないのではないかと。

早い話が、世のいわゆる論文なるものを読んでみると、「客観的推論」どころか、至るところに「主観的推論」がある。ここで言う「推論」とは、論理学上の「推論」という意味ではなく、直感的な蓋然的確率的推量の意味である。たとえば、「……とも言えるが、逆のことも言えるだろう」などという文に出くわす。これなどは実証性のない推量である。あるいは④「……ではなからうかと思われるほどである」などという無責任な推量もある。

私は思う、世に「実証的論文」などは存在せず、もしあるとすれば、「実証的報告に基づいて推量を行なう論考」であろう。それが論文の本質であると考えている。

一步一步と段階を踏むことに徹し、ジャンプを許さない実証的手法は、報告作成という研究に最もふさわしい。しかし、ジャンプによって仮説を立て、それを検証しつつさらにジャンプを行なって論旨を展開する論文にとつて、実証的手法はむしろ足をひっぱるものとなる。報告は客観性の実質化であるが、論文は主観性のそれである。

たとえば、私の仕事で言えばこうなる。儒教における孝とは、祖先祭祀、親への愛・敬、子孫を生むこと、この三者を併せている。そのことは、文献によって実証可能である。それは孝とは何かとい

(1-18)

う概念化のための報告である。いや、論文中に引かれているときは、報告的部分と言うべきであろう。論文中の引用ではなくて独立した調査ならば、報告である。

さて私は、この報告的部分（あるいは報告）を踏んで、一つの解釈を与えた。すなわち、儒教のこの孝をば、死の恐怖を克服する生命論であると。それは仮説である。それは前記の報告的部分（あるいは報告）を踏んでの推定である。ジャンプである。ジャンプした「論」である。

こうしたジャンプは、実証的手法による報告から直接的に生れてくるものではない。そうした報告に基づきつつも、その報告の事実が何を意味するのかということを思惟した（哲学した）結果から生れたものである。その思惟はジャンプである。実証的報告をいくらいじくりまわしても、そこからその論理的帰結として新しいものは出てこない。実証的報告それ自身は完結した世界であるからである。

だから、実証的報告に対して、或る独自の解釈を与える、或る意味づけを行なう、そういうジャンプによって「論」が新しく生れる。それは主観性の凝縮されたものである。

——加地伸行「中国哲学史研究ノート（六）」（『中国研究集刊』月号（第十号）所収）による

（問題作成上の都合から一部原文の表記を改めた）

（注） * 1 書誌……その書物の由来や成立などについて記したもの。

* 2 文献提要……その文献の要旨をまとめたもの。

* 3 アカデミシヤン……ここでは、研究に携わる者という意味。

* 4 蓋然……断言はできず、たぶんそうだと思う様子。

* 5 祖先祭祀……祖先を敬い、祭り上げること。

問一 ~~~~~線部 A「異にしている」、B「銘打つ」、C「会心」について、これらの言葉を本文中と同じ意味で使っている文として最もふさわしいものを、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

A「異にしている」

ア 高層マンションを建てることを異にしている住民が多くいる。

イ 彼は気のいい同僚だが、こと仕事の能率化という点では、私と意見を異にしている。

ウ 読書を異にしている人と話すと、新たな知見を得ることができる。

エ 幼稚園からの仲の良い親友だったが、中学校進学を機に二人の関係を異にしている。

オ 答え合わせをしたところ、自分の答えは模範解答を異にしている。

B「銘打つ」

ア 変わり映えのしない恋愛小説と銘打つ作品は、世の中に掃いて捨てるほど存在する。

イ 仕事一筋の彼が故郷に帰ると銘打つとは、思いもなかった。

ウ 本格的インドカレーと銘打つ割には、味付けは日本の家庭的なカレーに近い。

エ 多くの人が老舗だと銘打つそば屋ではあったが、去年閉店してしまった。

オ 技術の飛躍的な進化と銘打つからには、性能の向上は期待できないものだ。

C「会心」

ア これまでの会心の勉強が実を結び、試験で満点を取ることができた。

イ 画家としての従来のイメージを塗り替えるような、会心の一枚ができあがった。

ウ 災害ボランティアに参加した彼は、少しでも助けになりたいと会心の思いで作業を行った。

エ 遠距離恋愛をしている二人は、会心のせつなさをいつも胸に抱いている。

オ この交響曲は、彼の死後初めて、会心の作品として高く評価された。

問二——線部①に「実証的手法」とありますが、これはどのような方法ですか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 根拠となる資料の内容が正しいか誤っているかを、一つずつ実際に証明していく方法。
- イ 論理的矛盾がないように、丁寧に「論」を展開して結論を導いていく方法。
- ウ 集められた多くの資料と現実起こった出来事を照らし合わせ、それぞれ吟味していく方法。
- エ 信頼できる証拠に基づいて、理解しやすい表現で真実を立証していく方法。
- オ 誰もが納得できるように、一つ一つ手順を踏みながら事実を集めていく方法。

問三——線部②に「とにかく根気よく時間をかけ努力すれば、形にすることができる」とありますが、それはどうしてですか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 報告をまとめる手順は明確であり、その方法は訓練したり教育したりすることもできるので、結果を提示する上では、特別な資質は必要とされないから。
- イ 報告に携わるものにはたいした才能があるわけではないから、他人より少しばかり努力をするだけで人目を引くような報告を完成させることができるから。
- ウ 扱う資料が客観性のあるものばかりに限定される、報告の作成という作業は、研究者としてまず身につけなくてはならない基本的な能力であるから。
- エ 思考を伴わない単純な作業であるため、研究者としての際立った能力や特別な訓練がなくても、根気さえあれば目的を成就することができるから。
- オ 統計や資料をある一定の法則に従って分析する作業に地道に取り組むことで、一人前の研究者に必要な粘り強さを獲得することができるから。

(1-21)

問四——線部③に「そもそも『実証的論文』などというものは、存在しないのではないか」とありますが、それはどうしてですか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 報告は実証的なものであるが、論文はその報告の上に立って推論を進めていくものであるため、両者では大きく価値が異なっているから。
- イ 世の中には客観的推論どころか、至る所に主観的推論があふれており、ほとんどの論文は実証性があるとは言い難いから。
- ウ アインシュタインの論のように歴史的に高く評価されているものであっても、いずれは新しい研究の成果によって否定されかねないから。
- エ 実証的手法は客観的なものであるのに対して、論文は主観的なものであるため、方向性が異なり、矛盾するから。
- オ 誰もが訓練によって作成することができる実証的報告と、研究者としての価値が試される論文とでは、本質的に性質が異なっているから。

問五——線部④に「『……ではなからうかと思われるほどである』などという無責任な推量もある」とありますが、なぜ「無責任」なのですか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア わかりにくい比喻をあえて使ったり、発言の責任を回避したりしているから。
- イ 断定的な強調表現を使うことで、反対意見を封じ込めているから。
- ウ 遠回しな表現を重ねたり、人ごとのような言い方をしたりしているから。
- エ 難解な学術的表現を多用することで、信憑性を高めようとしているから。
- オ 執筆者が誰であるかわからなくすることで、責任の所在を曖昧にしているから。

(1-22)

問六 「論文」について、次の(1)・(2)の問いに答えなさい。

(1) 筆者のいう「論文」にあたるものとして最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び

ア 自らの記憶を頼りにして、一年間の読書量と学校の国語の成績との間には相関関係があると

横浜市の過去十年間における年齢別の人口の変化を調査し、今後の人口の推移について見解

高性能な望遠鏡によつて遠く離れたある恒星を観測し、その明るさの変化を五年間に渡つて

工時間帯別の山手駅の利用者数を三ヶ月間計測することで、混雑状況（じようきゆうじょう）を緩和（かんわ）するためのデー

才大病を患^{わずら}つて五ヶ月間入院したことをき^{たましい}つかけにして、魂の永遠性について思いをはせ

【下書き欄】—— 必要ならば使いなさい。

60 40 20

番
聖光學院中學校

二〇二〇年度

第一回 入学試験 解答用紙 国語

【注意】 解答はすべてこの解答用紙に記入すること。

得点合計

①	
②	
③	
④	
⑤	

①	
②	
③	
④	
⑤	

三、問一

1503

問二



40 20

問三

40 20

問
四

11

1049

[illegible]

問七	A
	B
	C
	D

--	--



問十三番目	
六番目	

四、問一

問二

問三

問六	(1)



(2)

60 40 20